

令和5年度 第2回 印西市社会教育委員会議 会議録

- 1 開催日時 令和5年11月14日(火)
10時00分から12時00分まで
- 2 開催場所 印西市文化ホール 多目的室
- 3 出席委員 菊地委員、河村委員、松崎委員、石川委員、押田委員、
松山委員、高橋委員、箱崎委員、浅倉委員、片倉委員
小林委員、横田委員、山本委員、青井委員、香取委員
佐藤委員
- 4 欠席委員 馬場委員、小島委員、今野委員
- 5 事務局の出席 印西市生涯学習課
飯島課長、飯塚係長、平山主査補、川手主任主事
- 6 内容 議事
(1) 令和5年度生涯学習関連事業の進捗について
(2) 重点施策について
- 7 会議要旨

議事(1) 令和5年度生涯学習関連事業の進捗について

議事(2) 重点施策について

事務局 事務局より議事(1)及び(2)について説明

委員 事務局として、市民アカデミーの定員は何名が理想と考えているか。

事務局 運営上、最大でも30名程度と考えている。

委員 コロナ禍前とコロナ禍後では、かなり状況が変わったと思う。
コロナ禍が明けて、これまで出来なかった活動が出来るようになったことから、市民アカデミーの活動よりも出来なかった活動を優先しているのではないか。
そのため、応募人数が減少していることは、仕方無いと思う。
働いている方の参加も非常に厳しいのでは無いか。市民アカデミーの活動に充てる時間は無いと思われる。
また、年金支給の後倒しや定年延長により、70歳近くまで働く方が増えているのも、応募者減少の原因であろう。
市の人口は増えているため、広報活動等を継続的に行い、周知を図っていくしかないのではないか。

- 委員 市民アカデミーの参加者として、参加して良かったと感じている。印西市育ちではあったが、都内で夜遅くまで仕事をしている立場であったことから、地域のことに目を向けてこなかった。そんな中、市民アカデミーを通じて、印西市の地域資源や環境等について知るひとつのきっかけになった。60代以降、新しい仲間を作るきっかけが少ない中、市民アカデミーが仲間づくりの場ともなり得る。市民アカデミーを広めていくためには、広報以外に、参加者の口コミも必要だと思う。また、市民アカデミーのOB会が存在しており、小旅行や学びの延長として、市外の研究施設への訪問等を行っている。
- 委員 卒業した方の意見も貴重かと思う。卒業生が参加した中でどのようなことを感じたのか、また参加を希望するかなど、意見を聞いてみると良いと思う。参加するリピーターも必要ではないか。実施した内容の成果をSNSなど、発信の場を設けると、参加者へ達成感を引き出してあげられると思う。
- 事務局 卒業生の声を聞くことや、活動の成果を発信していくことについて、事務局で今後検討していく。
- 委員 以前は、卒論発表会に社会教育委員も参加していた。携わった方以外にも、見ていただくのは大事だと思うので、是非伺えればと思う。
- 委員 家庭教育学級について、講演会を実施し、参加しやすい環境づくりとあるが、市が計画してそれに参加をしてもらうという形なのか。
- 事務局 現在、各学校において、1学年を必修学級として開設し、年間の活動プログラムを作成する。例として、講演会の実施やものづくり体験等を各学校で実施している。市から実施内容を限定しているものではなく、各学級の委員により、実施する内容を計画していただいている。
- 委員 数十年前は、専業主婦が多く、時間に都合がつく保護者も多かったが、今は共働き世帯が増え、学校行事に参加されない方も多くなっている。参加率を増やすためには、家庭教育学級を運営している保護者の中で、自分たちが見たい、聞きたい、やりたい事業を作り出していただいたほうが参加率の増加が見込めるのではないかと。
- 事務局 第1回会議においても、行政主導で働きかけをするべきとの意見があったこと、各学校で行っている家庭教育学級の事業のほとんどが平日に実施されていることを鑑み、今回は行政主導で休日のイベントを計画した。

休日のイベントへの参加者が多いということであれば、休日実施のニーズ把握にもなり、今後の支援の方向性も定まると考えている。

委員 家庭教育学級は、子ども同士、親同士のつながりを創出できる場である。私自身も知り合いづくりという観点からもすごくよかったと感じている。

事務局 現在、ニュータウン地区に転入される若い世代のご家族が多い状況である。そういった中、新規転入者が家庭教育学級の事業について、何を実施しているかわからないという現状もあるかもしれない。保護者同士の仲間づくりの機会を創出することは重要だと考えていることから、SNSなどを通じて情報提供にも努めてまいりたい。

事務局 PTA活動や子ども会など、コミュニティという観点からも、人の意識が変わってきており、何十年か前と状況が変わってきていることから、社会教育の難しさを感じている。

委員 子育てについては、学童保育の部署と社会教育担当課がうまく連携出来ればいいと思うが、どう考えているか。

事務局 学童保育は市内の小学生が通える状況であるが、地域によっては、待機児童が生じている事例もある。他の自治体では、学童保育を補完する形で、放課後子ども教室を実施しているところもある。
委員おっしゃるように、学童保育所管の部署と情報共有を図りながら、課題に取り組んでいく必要があると考えている。

委員 家庭教育学級の事業内容としては、教育ではなく、支援という方向と見受けられる。
家庭を支援していこうという内容であれば、相談や支援という文言を使用すべきではないか。
教育という言葉は、どうしても上から目線で、上から一方的にやれというイメージが強い。そういった場には行きづらいと感じる。
どうぞ来てください、と手を広げて歓迎するような文言、タイトルにすると、人数が増えていくのではないか。
また、市民アカデミーについては、卒業後に知識を生かしたいと思う学生が意思表示出来るシステムを作ってあげることが必要だと考える。
人材バンクのような登録制度を使用して、卒業生の情報を広く公開すれば良い。
現状は、市民に還元出来ていない事業になっている。
生涯学習の一番のポイントは、学んだことをどう生かすかなので、是非方策を考えてほしい。

事務局 家庭教育学級の名称変更については、委員おっしゃる通りと考えるので、貴重な意見として検討していく。

- 委員 各学級において、学級名を決めることから、行政側の名称としては、家庭教育学級で構わないと考える。
家庭教育学級の問題は、必修学級から学年学級へ進級する際に、ほとんどの保護者が継続しないことである。必修学級に参加していた保護者を学年学級にも参加してもらえるよう方策を考えていただきたい。
- 事務局 委員おっしゃるように、各学級において、素敵な名称をつけて活動をされている。
過去の子育てと現代の子育ての違いがあることから、家庭教育指導員を中心に、保護者の方々への支援を続けていきたい。
- 委員 提案のあった休日の講演会について、子どもたちを見る人がいなければ、休日であっても保護者は参加しにくいと思うので、対応を考えてほしい。
- 事務局 講演会を実施するにあたっては、会場とは別部屋に託児スペースを設ける予定である。
- 委員 放課後子ども教室事業について、子どもの居場所づくりという目的で実施しているのであれば、福祉の部署が所管するべきだと思うが、生涯学習課が所管している理由は。
- 事務局 合併前の本埜村で実施していた事業であり、当時生涯学習課で行っていた事業を、そのまま継承しているためである。
- 委員 そうすると、滝野小学校、本埜小学校にある教室の機能としては、学童保育へ入れない子の受け皿ではないのか。
- 事務局 放課後子ども教室の元々の趣旨としては、放課後の居場所づくりである。そのため、学童保育の就労支援とは違い、社会教育の観点での事業と考えている。
国の提唱している新・放課後子どもプランというのは、放課後子ども教室を学童保育と連携して実施するという趣旨であるため、今後拡大していく場合は、所管についても検討していく必要はあるかと思うが、現状は子どもたちに社会教育を提供する趣旨で実施している。
- 委員 他の小学校においても、放課後子ども教室に対する需要は相当あると思うが、それは把握しているか。
- 事務局 過去に、船穂小学校で実施している経緯があったが、コロナ禍により、活動を停止している。
その他、2校で実施している活動に関心を寄せる声もあるため、そういったご意見は取り入れていこうと考えている。

- 委員 放課後子ども教室を拡張していくと理解した。
次に、印西市民アカデミーの設置目的を伺う。
- 事務局 市民の生涯にわたる学習を支援し、学びあいによる仲間づくりを進め、学習成果を活かし、まちづくりに生きがいを持って取り組むことのできる人材を育成することを目的としている。
- 委員 PTA や家庭教育学級に携わった経験として、活動を通じて友達が増え、他の方の家庭環境を知ることが出来る機会となった。
しかし、小学校を卒業してしまうと、繋がりが無くなってしまうことから、各保護者が自分たちのスキルを生かせる場として、自発的に家庭教育学級の開設があってもいいのではないかと。
ただ、開設には労力が必要なので、伴走する人は必要だと思う。
保護者の方々は、様々なスキルを持っているので、事業のハードルを上げすぎないで、誰でも参加や講師が出来る家庭教育学級になればいいと思う。
- 委員 以前は、転校してきた保護者を真っ先に引き入れていた。転校生の保護者は、友達を作る機会が少ないことから、そういった方々のコミュニティの場としても機能していた。
また、保護者にスキルがある人がいれば、その方に講師をお願いすることや、海外から来た保護者に、それぞれの国の料理などを学んだりすることで、家庭教育学級の輪を広げていた。
活動するには、どうしてもお金が必要であるため、補助金が支給されるのはとても良いと思う。
- 委員 先程意見があったように、上から教育してあげるというスタンスだと、保護者は参加しづらいと思う。
急に委員になった人は、勝手にわからず、事業計画を立てる際に、前年と同じ内容になりがちである。そのため、毎年度の最後に、保護者にニーズの高かった事業や実施計画を集約した上で、次年度当初に行う説明会において紹介すると良いと思う。
家庭教育学級については、事業成果がすぐに出るものではないが、大切な内容であるため、是非継続してもらいたい。

意見・質問等については以上

以上

使用した資料

- 資料1 (1) 令和5年度生涯学習関連事業の進捗について
資料2 (2) 重点施策について

令和5年度 第2回 印西市社会教育委員会議の会議録は、事実と相違ないので、

これを承認する。

令和5年12月5日

印西市社会教育委員

署名委員 石川 久美子